

英語リーディング授業における ICT スキルの向上が

学習意欲に及ぼす影響の考察

デイヴィス 恵美^{*1}・松原 万里子^{*1}

Email: e-davis@otemon.ac.jp

*1: 追手門学院大学 基盤教育機 大学常勤講師

*2: 追手門学院大学 基盤教育機 非常勤講師

◎Key Words BYOD、アクティブ・ラーニング、ICT スキル

1. 研究背景

文部科学省(2018)は、アクティブ・ラーニングを重視し、グローバルに進展している教育研究のオープン化に対応し、ICTの活用を推進している。追手門学院大学ではこれまでも、学部や学年を超えた「学びあい、教えあい」を実現し、多様なスキルやマインドを身に付け、学びから得たものを実践に生かす教育に力を注いでいるが、さらに深い学びに繋がるように、2019年度よりBYOD(Bring Your Own Device)の導入を始めた。また、新校舎においては、ICTを活用したアクティブ・ラーニング(AL)を実践しやすい環境、たとえば、可動式の机や椅子、壁一面のホワイトボード、オンデマンドプリンターの各階への配置などがなされている。これらの環境を基盤とし、初年次英語教育は学生がPCやスマホを使用し、リサーチやディスカッションに積極的に参加できるようにシラバスが作成された。本稿は、本学の経済、経営学部生1年生7クラス148名の英語講読クラスにおけるBYOD環境を援用したアクティブ・ラーニングの実践報告である。

2. 研究の目的

2.1 検討課題

研究背景を受けて、BYODによりICTスキルの向上が期待されるが、そのことが大学初年次英語教育における大学1年生の学習意欲にどのように影響を及ぼすかについて検証する。具体的には、打鍵率によって量的にICTスキルの向上を測るとともに、アンケート調査によって、質的に学生の意欲の変容の状況を把握する。

2.2 仮説

木村・近藤¹⁾の調査では、スマホに最も慣れ親しんだ世代と思われる学生が入学してきた2015年度以降、パソコンを扱う上での基本的なリテラシーが身につけていな

い学生が急増したことを報告している。このことは、文字入力という操作が、一定の範囲でICTに関連した学習成果につながることを示唆していると言える。また、長澤²⁾はキーボードによる文字入力が速いレベルで習得できれば時間短縮につながり、ひいては授業でのノートテイキング、長文レポートの作成、またはプログラミングなど、様々な範囲でのタスクに躊躇なく取り組むことが可能になると予測している。さらに、高水準で多くの作業をPCでこなせるようになることは、就職への不安を払拭するなど、精神的にもポジティブな影響を持つことが期待される、としている。

3. 研究方法

3.1 参加者

本調査の参加者は追手門学院大学1年生で、共通必修科目であるGeneral Reading Iの受講者148名である。内訳は経済学部3クラス(男子50名、女子5名)、経営学部4クラス(男子61名、女子32名)の合計7クラスが対象となった。参加者は全員個別のPCを持っており、基本的に全ての授業に持参することが条件づけられている。

3.2 実験材料

- 参加者の大学入学時点でのICTスキルを把握するために「BYODと英語学習に関するアンケート」⁴⁾を5件法で実施した。(表1、参照)
- 打鍵率に関しては、ベネッセコーポレーションが提供するオンライン学習ツール、マナビジョン⁵⁾で利用できる無料タイピング教材の中から英語入力を選択し、打鍵測定に2分間を設定した。判定結果のうち、打鍵数を報告してもらった。
- ICTスキルの向上と学習意欲の変容を把握するために「英語学習の取り組みに関するアンケート」⁶⁾を7件法で実施した。

3.3 手続き

まず調査に先立ち、参加者にはBYODの推進に伴い、大学として学業への効果を測定する必要があることを説明し、調査協力への理解を求めた。また、得られたデータに関しては、個人の特定ができないように配慮することも周知した。

本調査は以下の日程で実施した。

1. 第1回目授業（4月第2週）
「BYODと英語学習に関するアンケート」
2. 第3回目授業（4月第4週）打鍵1回目測定
3. 第9回目授業（6月第1週）打鍵2回目測定
4. 第14回目授業（7月第2週）打鍵3回目測定
「英語学習の取り組みに関するアンケート」

4. 結果

まず始めに教育介入前の参加者のICTリテラシーの状況について表1にまとめる。

表1 「BYODと英語学習に関するアンケート」 (抜粋)

項目	最多回答	%
入学前PC利用年数	半年未満	52.5
Wordが使える	どちらとも言えない	41.7
Excelが使える	まったくできない	43.2
PowerPointが使える	どちらとも言えない	41.0
Emailが使える	どちらとも言えない	41.5
Web検索ができる	できる	54.4
タッチタイピングができる	どちらとも言えない	39.3
PCやネットの知識がある	どちらとも言えない	44.1

次に、本調査期間においてBYODによるICTスキル向上の効果を調べるため、打鍵テストを3回実施し、それぞれの平均点を一元分散分析の反復測定で比較する計画である。本稿執筆段階では、2回の打鍵測定が終了したのみであるので、*t*検定により伸び率を確認した。その結果、 $t(147)=10.16$, $p<.001$ であり、平均点に有意差があることがわかった。（表2および図1、参照）

さらに2019年春学期終了時に、教育介入後の参加者の意識の変容について「英語使用に関するアンケート」の結果を質的に分析し、PC Conference 分科会発表にて報告する。

表2 打鍵数の伸び (1回目・2回目)

	N	Mean	SD
打鍵1	148	142.9	43.1
打鍵2	148	169.6	44.6

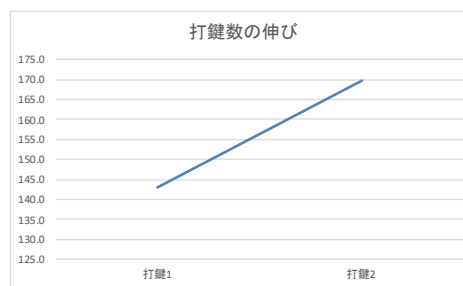


図1 BYODによる打鍵数向上の効果

5. 考察

*t*検定の結果から、大学に入学して1ヶ月程の間に、積極的にBYODを推進した授業に参加をすることで、タイピング能力は明らかに向上した。このことは、文部科学省が期待する、ICTを推進した教育機会の提供により、グローバル化する社会に柔軟に対応できる人材育成に、本校の取り組みが的確に示唆するものであり、今後一層の改善と推進をしていくべきものであるといえる。さらには、BYODの推進により、リサーチやディスカッションなど、学生が主体となって学修に取り組める環境が、本校が掲げる「学びあい、教えあい」を実現し、多様なスキルやマインドを身に付け、学びから得たものを実践に活かすことができる、というポジティブな自己肯定感へと繋がっているかについて、質的な分析を行い報告する。

参考文献

- (1) 木村修平・近藤雪絵(2017). 'パソコンが使えない大学生'の実態に迫る -立命館大学6学部の横断調査に基づいて-. *PC Conference 論文集* pp. 279-282.
- (2) 長澤直子(2017). '大学生のスマートフォンとPCでの文字入力方法 -若者がPCよりもスマートフォンを好んで使用する理由の一考察'. *コンピュータ&エデュケーション*, VOL 43, pp. 67-72.
- (3) ベネッセコーポレーション: マナビジョン <https://manabibenesse.ne.jp>
- (4) CIEC 小中高部会 (2006). 高等学校教科『情報』の履修状況調査の集計結果と分析. *コンピュータ&エデュケーション*, 21, pp. 10- 16.
- (5) 廣森友人・田中博晃 (2006). 英語学習における動機づけを高める授業実践: 自己決定理論の視点から. *Language Education and Technology*, 43, pp. 111-126.